

グレアム・グリーンの『掟なき道』の「プロローグ」について

Graham Greene's *The Lawless Roads*: Reflections on the 'Prologue'

岩崎 正也

Masaya Iwasaki

1

グリーンが1991年4月3日に亡くなり、その小説作品が出揃ったいま、グリーン研究は生涯の伝記的な事実を見透したうえで、全作品を再検討する時期に入ったといえる。その課題の一つは、『内なる人』(*The Man Within*, 1929)の発表以来、60年以上にわたる永い作家生活の途上で、40年代末までにはほぼ完成された三人称による視点描写の技法が、51年に刊行された『情事の終り』(*The End of the Affair*, 1951)のなかで、なぜ一人称による語りに移行したかという必然的な理由と、その技法の検討にあると筆者は考える。

「中年になると、作家にはもはや自分の方法を思いどおりに操れなくなる瞬間が訪れるものだ」というように、倦怠期の始まりを十分に感じたグリーンがディケンズの『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61)からヒントを得て、一人称の語りを取り入れたのは、それまでの作者による注釈する権利を棄て、時間の流れを工夫することによって、作者を主人公の陰へ埋没させるためだったのではないか。時間の処理を最大の技法の一つと考えたグリーンがみずから、『情事の終り』の評価を、「これは私には時間の前後関係の扱い方から生ずる退屈さを避けるために巧みに構成されているように思われる²⁾」と記しているからである。本論では二つ目の問題である『情事の終り』に見られる一人称の語りの構造を解くヒントとして、この小説の語り口とパラレルの関係にあるという見方から、『掟なき道』(*The Lawless Roads*, 1939)のプロローグの語りを検証してみたい。一人称の技法の鍵は自伝や自伝的エッセイの制作方法にあると考えられるからである。

2

パブリック・スクール時代にグリーンと同級生であったピーター・クウェネルは、「悲しそうなマスク」をつけた18世紀イタリアの即興喜劇に出てくるピエロとしての実在のグリーンと、エッセイのなかに書かれた深刻なグリーンとの違いに着目し、書くグリーンについて「彼は、自分も読者も身の毛のよだつ思いがするのをかなりおもしろがっていて、——生徒らしい軽快なおもしろがり方だが——こんなに非凡な技術をもって引き起す嫌悪と恐怖の感情をなかば楽しんでいるのではないかと思わないわけにはいかない³⁾」と述べる。その後、作者が67歳のときに出版した『自伝』(*A Sort of Life*, 1971)について、書くグリーンと書かれるグリーンとの存在を指摘したイアン・グレッガーは、両者の違いを作者による視線の選択の技法として検討する。グリーンは、自伝が自己の臨終を取り扱うことができない以上、「どんな結末も恣意的な(arbitrary)ものにならざるをえない⁴⁾」という。したがって、『自伝』を自己の26歳から28歳頃までの3年間に味わった失意の時期で閉じたのも、「失敗もまた一種の死」だからである。『自伝』の前半は、「追われる」存在として苦渋に充ちたバーカムステッド校の寮生時代の体験から、後半はジャーナリスト時代と作家として出発したころの体験から構成されている。自伝の主人公であるグレアムは、作者グリーンの厳しい選択の視線をたえず浴びて、職業的な作家として登場する。しかし、読者が知りたいと思う二児の父としてのグリーン、カトリックへの改宗の真の動機、妻と子との生活などの事柄はほぼすべて排除されていて、グリーンは制作力をかきたてる「幼年時代、倦怠、反復的な失敗の意識」などのオブセッションの心象風景ばかりが充満しているのは、自伝に作者と

しての注釈や選択の権利が行使されているからである。そのためグレガーは、この自伝を“a sort of fiction”と規定する⁵。選択の視線による方法は『情事の終り』のなかで、一人称の語り口により、十分に駆使されているが、それ以前の、すでに、30年代に書かれた自伝的な旅行記『掟なき道』(The Lawless Roads, 1939)のなかで示される。

恐怖と魅力が充満していた。こっそりと一時間は逃げていた。辺境の見張りに気づかれないようにして後ろを見わたせる国境の向う側に立った。メンデルスゾーンを鑑賞しているはずだったのだが、代りにクロッカー用のフープの近くに兎ががさがさと草を食んでいる音が聞こえた。

それは救いの一時間だった。また祈りの一時間でもあった。神を強く意識した。時間が宙ぶらりんになって停止する。音楽が空中に漂った。国境の向う側の人ごみのなかへ入らなければならないが、それまではどんなことでも起きるかもしれない。どこにも必然性はなかった....信仰は山を動かすくらいに大きくなっていて....大きな建物は暗闇のなかで揺さぶられた。こんなふうに信仰がやってきた——形にとらわれずに、教義も示さずに、クロッカーの芝生のあたりに存在して、道の向う側にある暴力や、残虐さや、悪と結びついたものとして。私は地獄の存在を信じたから天国の存在を信じるようになった。しかし、永いことはっきりと身近に描くことができたのは地獄だけであった⁶。

この文章は、「13歳のころだったと思う」という書き出しで始まるプロローグの一部だが、学校と家庭の両方から逃げだして、クロッカーの芝生の陰に潜んでいたときの生徒であるグリーンを意識のうえに、一時間のうちに起きた心象風景であるかのように語られている。そのため読者はこの語り口と時間層の処理の仕方に幻惑される。これは前段の、家庭と寮の両方の世界から逃れて「国境」であるクロッカーの芝生に佇みながら悪の存在を認識するグリーンを意識と、後段の、神への信仰を体験したときの意識の二種を含むが、この心象風景をどう解釈したらよいか。

「追われる」存在として悪を意識する当時のグリーンを知るために伝記的な資料としてこれまで、『オールド・スクール』(The Old School, 1934)、『地図のない旅』(Journey Without Maps, 1936)、『掟なき道』、『失われた幼年時代』(The Lost Childhood and Other Essays, 1951)、『エッセイ集』(Collected Essays, 1969)、『自伝』、『逃走の方法』(Ways of Escape, 1980)などの著作があったが、それらの記事が互いに重複しているのは、『逃走の方法』によれば、「彼らにだってプライバシーの権利はある。そして、自分のことを書こうとすれば、必然的に彼らをも巻き添えにすることになるから⁷」であり、グリーンはなおも多くの秘密を守ってきた。ところが、1989年に、グリーン承認を経たノーマン・シェリーによる『グレアム・グリーン伝』(The Life of Graham Greene Volume One: 1904-1939)が刊行されたために、自伝のなかで書かれた作者の28歳までの履歴はほぼすべてがこの伝記によって裏付けられることになった。

3

グリーンは自伝のなかで、「狭い一つの場所にいる17人ものグリーン数は、今日でも人口の比率からいうとひどく高いように思われ、また休暇のときになるとその人数は100人の四分の一近くになることがあった⁸」と記しているが、このグリーン一族の繁栄の始まりは、曾祖父のベンジャミン・グリーンがいまもグリーン一族が所有権をもつペリー・セント・エドマズ市にあるウエストゲイト通りの土地で「グリーン・キング」ビール会社を設立し、後にセント・キッツ島で広大な砂糖農園を購入したときに遡る。次の祖父のウィリアムの世代は、ビール会社経営と農園所有のほか、船舶運送業、ロンドンの金融業に進出し、さらに父親の世代は、財産のうえに社会的な名声と知性を獲得する⁹。その結果、ブラジルのコーヒー農園で財を成した父の弟のエドワード・グリーン家が金持ちのグリーン、父の一家がインテリのグリーンと呼ばれるようになる。

グリーン之父チャールズ・ヘンリー・グリーンはまたいとこのメアリアン・レイモンド・グリーンと結婚し、4男2女を儲ける。モリー・ハーバ

ート、レイモンド、グレアム、ヒュー、エリザベスと続くのだが、グレアムは3男として1904年10月2日、ロンドンの北西26マイルの所にあるハーフォードシャー州のバーカムステッドの町に生れる。父は当時、創立以来360年の歴史をもつバーカムステッド・スクールのセント・ジョン寮に寮監として家族とともに住んでいた。6歳の時に父が校長に昇進したので、一家は校長公舎に移るが、13歳のとき、グリーンは寮生として再びセント・ジョン寮のなかで暮らし始める。

まず6人の兄弟姉妹の年齢差はどのくらいあるか。シェリーの『グレアム・グリーン伝』とトレシーのヒュー・グリーン伝である『さまざまな人生』(A Variety of Lives, 1983)から6人の年齢を示す記事を引用すると、

- (1) モリー。「姉のモリーはグリーンが生まれたとき13歳だった¹⁰⁾」。
- (2) ハーバート。「1909年のイースターの最中、ハーバートの11歳の誕生日に際して、一家はサセックス州の海岸にあるボグナー・リージス近くのリトルハンプトンという海岸保養地でしばらくの間過した¹¹⁾」。
- (3) レイモンド。「...しかしグレアムより3歳年上であるレイモンドは名声の頂点に辿り着こうとしていた¹²⁾」。
- (4) グレアム。「1904年10月8日付の『バーカムステッド・ガゼット・アンド・ヘミル・ヘムステッド・オブザーバー』紙は次のニュースを伝えた。『10月2日、バーカムステッドのセント・ジョン寮でチャールズ・H・グリーンに妻に息子が誕生¹³⁾』」。
- (5) ヒュー。「ヒュー・チャールトン・グリーンは1910年11月15日夕方8時15分過ぎに生れた¹⁴⁾」。
- (6) エリザベス。「1918年11月10日、日曜日、ジェイムズ・ウィルソンは日記に書く。... (中略)... エリザベス・グリーンは当時4歳だった¹⁵⁾」。

以上の記事を照合すると6人の年齢差は次のように決定される。モリーとハーバートは7歳、ハーバートとレイモンドは3歳、レイモンドとグレアムは3歳、グレアムとヒューは6歳、ヒューとエリザベスは4歳、エリザベスとモリーは23歳の

差がある。グレアムを基準にすると、レイモンドが3歳上、ハーバート6歳上、モリーが13歳上、逆にヒューが6歳下、エリザベスが10歳下である。1865年生れの父チャールズ・グリーンは1894年にセント・ジョン寮の寮監になったが、2年後に副校長を務め、また1911年から1924年までの13年間校長を務めた。したがってグレアム・グリーンは生れてから1922年オックスフォード大学に入学するまでの17年間を、バーカムステッド校地内で過ごしたことになる。グリーンは自伝のなかで生涯の最初の記憶を二つ次のように記す。

私の最初の記録は、丘の頂で乳母車のなかに坐っていて、足下に死んだ犬が一匹いるということである¹⁶⁾。

これは馬車かなにかに轆かれたモリーの飼っていたペキニーズを付き添いの乳母がグレアムの足下に置いて運んだときの風景である。グリーンはここではなんの感情も交えずに事実として述べているに過ぎない。またこの体験を『地図のない旅』のなかでは、「この光景になんの感情も起らなかった。それは一つの事実に過ぎない。人生のその時期には、驚くほどの客観性をもつものだ¹⁷⁾」というように客観的に回想しているが、果たしてなんの感情もなかったのか。これは大人になった作者の理性的な語り口だと考えられる。なぜなら、それから数カ月後グリーンは“Poor dog”と言って母親をびっくりさせたからである。しかもそれはグリーンが初めて喋った言葉だというのだ¹⁸⁾。

グリーンが見た二つ目の死の光景は、ある男が喉を切って自殺を図る場面である。グリーンはこの記憶をエッセイのなかで3回にわたって書き留める。一回目は『地図のない旅』のなかで、「もう一つの事実は、運河の橋の近くの家からとびだして隣の家へ走りこんだ男のことだ。男は手にナイフをもっていた。人々は叫び声をあげて男を追いかけた。男は自殺したがっていたのだ¹⁹⁾」と記す。二回目の『掟なき道』のなかでは、作者は、「私は運河のそばに傾いた小さな救貧院があるのを憶えている。その一軒に男が狂ったように駆けこんだのだ。私は乳母と一緒にいた。男はなにかに怒っているようだった。男は近所の人たちから逃げだ

せれば、ナイフで喉を切ろうとしていた²⁰」と書く。三回目の自伝の冒頭では、「小さな家が並んでいるそのなかの一軒に人だかりがして、一人の男が群をとびだし、家のなかへ駆けこんだ。その男が喉を切ろうとしているのだと教えられた²¹」と述べるが、二回目までの記事と異なる点は、周囲の人々はだれも男のあとを追わず、成り行きを見ていたことである。したがって男が自殺を果たしたという記事は自伝を書くために兄レイモンドから聞いたこととして脚注に記される。シェリーは当時の「パークムステッド・ガゼット」紙を探したが、その記事は見当らなかったという。この二度にわたる「死」の発見の体験は、グリーンのおブセッションとなったという点で注目値するだけでなく、作者が自伝の冒頭を「死」の発見で始めたことは私たちが自伝を貫く制作意図を知るうえできわめて暗示的である。なぜなら『自伝』に流れる生の在り方を探ることが、幼年時代における作者の現実認識の構造とその反映である小説作品に表れるさまざまな死の風景を解くヒントになるからである。

グリーン家の子どもたちはエドワード朝の中流階級の生活様式に基づき、乳母主導型の日を過す。朝、子ども部屋で朝食をとってから、そこにおいて、午後11時頃、階下へ下りて母親と一緒に過す。昼食は子ども部屋でとり、午後、乳母や子守と一緒に散歩に出る。お茶の時間は子ども部屋に乳母という。その後、応接室で母から本を読んでもらう。夕食、就寝。

父は校長を務めていて、母は乳母を含む6人の使用人の監督をしなければならなかったため、子どもたちは必然的に両親からはなれて、大部分の時間を乳母たちと過さなければならなかった。しかし13歳のときセント・ジョン寮に入るまでは、グリーンにとってこの生活は少なくとも孤独感でなく、仲間意識と愛情を植えつけた。グリーンは公舎内の子ども部屋を「石造りの教会と古い墓地を見渡せる乱雑な大きな部屋で、玩具戸棚や本棚、意地悪な目つきをした大きな揺り木馬、それに鉄のストーブ囲いのそばには乳母のための居心地のよい大きな籐椅子があった²²」と回想する。

生涯にわたりおブセッションの一つになる恐怖も公舎の生活から生れた。グリーンは鳥やコウモ

りにたいする恐怖感を母から受け継いだため、大人になっても羽毛の感触が嫌いで、コウモリは恐怖の対象だった。後にインドシナ戦争を取材したときの回顧として、コウモリを見るよりもヴェトミンの奇襲の方がまじだった²³と記す。グリーンは夜寝るときにお気に入りのテディ・ベアなどの動物たちの縫いぐるみをベッドに持ちこんだ。そのなかに嫌いなピロードの鳥が入っていたのは、「ベッドをいっぱいにするためだけだった」からだという。寝る時間になると、火事にたいする恐怖感と家族から見棄てられたという孤独感から、グリーンはテディ・ベアを床に放り出し、乳母に拾ってくれと叫び、乳母がやってくると、安心して眠ることができた。シェリーは子ども部屋の孤独感が「地下室」(‘The Basement Room’, 1936)のなかにモチーフとして再現されているという。ベインズとエミーがフィリップ少年をベッドまで送りどけた後、「ドアの開く音、時計が鳴る音や長いこと彼らの話す声が聞こえた。それで彼らが遠くにいないので自分が安全だと感じた²⁴」。

またグリーンは魔女に襲われる悪夢を見るようになったのは7歳になってからだと記すが、シェリーによると、その悪夢はグリーンの想像力の産物ではなく、「快適さは現実ではない。現実には恐怖に充ちた出来事だ。ベッドに行く途中にある階段、踊り場にあるなにも入っていない食器棚、白い膨らんだ手と肉づきのよい顔をした魔女²⁵」であり、それが「地下室」に再現されているのだという。グリーンは鳥にたいする恐怖感も、「パーティの終り」(‘The End of the Party’, 1929)のなかで、隠れん坊を始めるときに、双子の兄のピーターが、「大きな鳥が翼を拡げて弟の頭のうえに影を落とす」のを意識をすることろにモチーフとして再生される。

国境の隠喩としてのラシャ張りのドアの原型は、6歳のときに一家が移り住んだ公舎のなかにあり、私邸と校舎を隔てているが、グリーンは「国境」を次のように記す。

校舎は父の書斎の向うにある緑色のラシャ張りのドアを通り過ぎたところから始まる。廊下は休日には私たちが遊ぶことができる古いホールに通じ、もう一方の廊下は寮母の部屋のテラ

スへと続いていた²⁶。

『自伝』に示されたラシャ張りのドアについての記事は作者の冷静な理性によってなんの感情をも含めずに語られる。しかし、32年前に書かれた『掬なき道』のプロローグでは、家庭にたいしては愛情を、学校にたいしては烈しい憎しみの気持ちをこめながら幼年期の心象風景が語られる。

父の書斎のわきの廊下にある緑色のラシャ張りのドアを開けると、紛らわしいほどよく似た別の廊下に出る。それにもかかわらず、そこは異国の土地なのだ。寮母の部屋からヨードチンキの、更衣室から蒸したタオルの、あちらこちらからインクのかすかな匂いがしていた。再びドアを背にして閉めると、世界は違った匂いがした。書物と果物とオーデコロンの匂い。私は両方の国の住人だった。土曜と日曜の午後にはラシャ張りのドアの片方の住人であり、平日はもう一方の住人だった。国境のうえで暮らしていると不安でないということがあろうか²⁷。

一方、ヒュー・グリーンは伝記作者のトレシーはラシャ張りのドアを次のように記す。

校長公舎自体は二つの区画に別れていた。私邸側ではヒューや兄弟姉妹が両親と暮らしていて、両親の愛情がどちらかといえはば遠まわしで、ときどきサディスティックになるメイドがいたにもかかわらず、少しは満足を味わうことができた。一階のチャールズ・グリーンは書斎を越えて、狭くて天井が低く暗い石の廊下の端にある緑のラシャ張りのドアは両方の世界を隔てる国境地帯であった。ヒューはドアの私邸側にいるときはほぼ安心していられたが、そこを通過するといつも、その気分がすり抜けて嫌悪を感じたり憂鬱になったりした²⁸。

この文章の「ヒュー」を「グレアム」に置き換えれば、そのまま公舎のなかにはグリーンは幼年期を形成する生と死の世界が現れる。国境に佇んで二重意識に苛まされるグリーンは心象風景は、公舎に住んでいた6歳から13歳の間の意識なのか、

それとも13歳以後の意識だろうか。6歳のときの公舎の記憶は『自伝』に、「最も印象的な新しいことは、表の通りから玄関まで長い小道があり、右手に赤煉瓦のチューダー様式の講堂があり、左手には、花壇を隔てて、古い使われていない墓地があったことだ²⁹」と記されているように、たんなる見取図としての外観の記述に過ぎない。グリーンが「追われる」を意識したのは13歳のときセント・ジョン寮に入ってからである。マリー＝フランソワーズ・アランとの対談のなかで、「『分裂した忠誠心』が現れたのは少年期と青年期の間ですが、それ以前はどうだったのですか」と尋ねられて、「幸福な状態だよ。少年時代は13歳まではきわめて平穏だった。家庭から寮へ送り出されるまではね³⁰」と答える。

4

グリーンと両親の疎遠な関係の原因は、子どもたちが一日の大半を両親から離れて、乳母たちとともに過すという当時の生活様式にあったが、シェリーは「それは愛情の欠如からくるというよりは性格の違いから生じたように思われる」と言い、そのような父と母に挟まれて、グリーン自身の消極さと内面の問題を伝えられない無能力さとが結果として危機を惹き起すことになった³¹と指摘する。

かつてハノイのイギリス領事を務めたトレヴァー・ウィルソンは晩年のメリアン・グリーンを訪ねたときの憶い出を、「彼女は当時80歳代になっていたに違いない。たいへん美しい人だった。グレアムについては大事なことを言った。彼女は静かに『グレアムの面倒を見てください』と言ったよ」と語り、グリーンにたいするメリアンの愛情が変らないことを伝える³²。一方、父親のグリーンにたいする愛情は母親以上に距離を感じさせた。グレアムの意識は父の愛情にたいしむろ逃避感情を抱き、父から褒められると、「すぐに手近にあるテーブルの下にもぐりこんだ³³」という。校長のチャールズ・グリーンは生徒たちから近づきがたいと思われていて、クロード・コックバーンによると、校長のお気に入りの言葉は“keenness”だったという³⁴。またR.S.スタニエは次のエピソードを記憶していた。一般の生徒たちは9時に寝る

ことになっていたが、監督生たちはあと一時間起きていたことを許されていた。チャールズ・グリーンは監督生がこの時間を予習に使うことを期待していたので、ある日用事で監督生を呼んだとき、風呂に入っていたのを知って、驚いて、「きみは風呂に入るために自分の義務を棄てるつもりかね」と皆の前で尋ねたという³⁵。

グリーン自身は校長としての父にたいしては尊敬の気持を抱き、「私が父である校長の業績を褒めるのは家族への誇りからではない。父は賞賛に値するほど進歩的な校長であり、在職期間の晩年ほど進歩的であった時期はない。進歩的な学校でいまでも大胆な新制度と思われる大部分の改革が当時のパーカムステッドでうまく実行された³⁶」と記し、また、親としての父についても、結婚して子どもをもったときに初めて埋れた愛と悲しみを意識したと述べている。しかしこれらはどちらも寮生活の恐怖によって惹き起された自我の分裂を克服できるようになった成人後のグリーンによる理性的な解説である。

1914年、ジュニア・スクールに入学してから、グリーンは学校生活に不適應の反応を示す。それは体育や軍事教練という規律を強いられる場面である。まずグリーンは体育の女性教師に、病気だと偽って授業を休む。11歳になると、食事を子ども部屋ではなく大人たちと一緒に食堂でとることになる。朝食後は全校礼拝のためチャペルへ行くことになっていたけれども、一人だけで中庭にいた。『自伝』によると、学期の最後の日までずる休みをしたと記すが、ヴィヴィアン宛ての手紙では2週間だった³⁷という。ある日、校長が息子の担任からグレアムの病状はどうかと聞かれたときにグリーンは病気が発覚した。そのためグリーンは父から杖で打たれた³⁸。

セント・ジョン寮生活の不潔さと残酷さ——これがグリーンは知覚した悪の心象風景だが、『自伝』では次のように記されている。

私は文明をあとにし、奇妙な慣習と説明のつかない残酷さのある未開の国に入りこんだのだ。そこでは私は異邦人であり、容疑者だった。不審な共犯者がいることが知れわたっている文字どおりの追われる生き物だった。父は校長では

ないか。私は占領下にある国のクィスリングの息子のようなものだった³⁹。

校長である父と寮長を務める兄レイモンドに代表される体制側と、それに対抗するいとこのベンを含む生徒たちの反体制側の間にあって、グリーンは意識がそれぞれの体制への二種類の忠誠心に引き裂かれたということをこの文章は示している。これにたいしシェリーは、「グリーンが置かれた境遇を記すのに使った感情表記を示す言葉を正当化するものはほとんど見当らない」と前置きして、次のように反論する。たしかにグリーンは校長の息子だが、公舎と寮の距離はわずかしがなく、兄レイモンドや、いとこのベンやトゥーターも同じ寮生であり、人格形成に傷痕を残さないで卒業したことを考えると、グリーンは生活態度の衰弱と寮での苛めの記事は重要ではない⁴⁰という。そのあとシェリーは本論の冒頭に引用した、グリーンがクロッカーの芝生に潜むときの心象風景を取り上げて、この記憶は誇張ではないが、その表現に注意しなければならないと述べたあとで、グリーンはカルチャー・ショックを受けたのだ⁴¹という。

グリーンは、アランとの対談で、プライベートの寮生活について、「あれは『脅威』だった。いつもプライベートが必要だったと思う。乱雑さ、孤独が少しもない状態、——脅威だったよ⁴²」と述べているが、グリーンを知る卒業生たちはグリーンについて次のように言う。サー・セシル・パロットは、グリーンはとくに適應力に欠けていた⁴³という。R.S.スタニエは、生徒たちがグリーンをからかったのはそのおかしな発声の仕方であり、また、集団競技には参加しなかったので、当然、苛められたことを証言する。また、J.B.ウィルソンは、寮長を務め、ラクビー・チームに属していた兄のレイモンドは万事に完璧だったので、生徒に尊敬されたが、グレアムはどこにも見当らなかった⁴⁵と言う。グリーンは苛められたことについて、『自伝』のなかで、「子どもたちはひどく残酷になれるものだが、私にはなんの肉体的な拷問も加えられなかった」と書くが、『掟なき道』では逆に、初めは肉体的な苛めがあったことを示唆する。

コリファックスがいて、コンパスで拷問を加

えた。三重にくびれたいかめしい顎をして汚れたガウンを着て、一種の悪魔に取り憑かれたような好色さを感じさせるクランドン先生、これらの高い所から悪がパーロウの方へ下りてきた。彼の机にはくだらない写真——芸術写真の広告がいっぱい入っていた⁴⁶。

コリファックス、クランドン、パーロウの三人はだれか。仮名と実名の関係を考証したシェリーによれば、グリーン最初の小説‘Anthony Sant’（オックスフォード大学生のときに書かれ、のちに‘Prologue to Pilgrimage’と改題）のなかに、女の裸の写真を収集する Porter が登場する。さらに『英国が私をつくった』(*England Made Me*, 1935)には女の胸と太腿の写真を眺める Gullie が現れる。シェリーは Gullie がアマチュアの船舶画家であることにヒントを得て、グリーンと同じ頃にセント・ジョン寮に Henslowe というアマチュアの航空機の画家が監督生を務めていることを探り出し、同じ韻をもつことから、Henslowe が Parlow の実名だ⁴⁷という。また三重顎の Cranden は、32年後に発表の『自伝』のなかで Dr. Simpson という実名で登場する。コリファックスの実名は Carter で⁴⁸、Wheeler を部下にして二人がグリーンを脅すのだ。『自伝』刊行のとき Wheeler はまだ健在だったので、Watson という仮名で記されている。Carter はグリーンの中の忠誠心の葛藤を巧みに利用して、体制側を裏切るように働きかけるが、グリーンよりわずか数か月年上であるに過ぎない。Lionel Arthur Carter は1904年5月12日に生れ、1971年5月17日に死去。

5

このようにして精神的な拷問に対抗できずに、グリーンは自殺を図るとともに、学校と家庭の両方から逃避行をくり返す。この逃避行の体験が本論の冒頭に引用したクロッキーの芝生に佇むグリーンに心象風景として記されるのだが、シェリーがこの日を1920年12月14日だと突きとめたために、時間の重層性は次のように理解することができる。文章の前半には、16歳のグリーンがクロッキーの芝地に佇みながら寮生活での悪の存在を認識する時間が流れる。後半には21歳のとき、

カトリックに改宗して以来、30歳のときのリベリア行きの途上で「生」への救いを回復するまでの10年にわたるさまざまな「死」の体験を回想する時間と、リベリアで再生を知覚したときの二種の時間が交錯する。したがって、冒頭の告白をしたのは16歳のグリーンの意識ではなく、35歳のグリーンによる選択の視線である。つまり16歳の「追われる」意識は、その後の19年にわたる認識の変化を示すフィルターをとおして、救いに達した39歳の作者の告白であるかのように語られている。このようにして作者の I は書かれる‘I’の陰に埋没する。

註

- 1 Graham Greene, *Ways of Escape* (London: Bodley Head, 1980), p. 134.
- 2 *Ibid.*, p. 136.
- 3 Peter Quennel, *The Sign of the Fish* (London: Collins, 1960), p. 62.
- 4 Graham Greene, *A Sort of Life* (London: Bodley Head, 1971), p. 9.
- 5 Ian Gregor, ‘A Sort of Fiction’, *New Blackfriars*, 53 (March 1972), pp. 120-124.
- 6 Graham Greene, *The Lawless Roads* (1939; London: Bodley Head, 1978), pp. 2-3.
- 7 Greene, *Ways Escape*, p. 9.
- 8 Greene, *A Sort of Life*, pp. 14-15.
- 9 Michael Tracey, *A Variety of Lives* (London: Bodley Head, 1983), pp. 3-4.
- 10 Norman Sherry, *The Life of Graham Greene Volume One 1904-1939* (London: Jonathan Cape, 1989), p. 10.
- 11 *Ibid.*, p. 14.
- 12 *Ibid.*, p. 396.
- 13 *Ibid.*, p. 3.
- 14 Tracey, *A Variety of Lives*, p. 5.
- 15 Sherry, *The Life of Graham Greene*, p. 60.
- 16 Greene, *A Sort of life*, p. 15.
- 17 Graham Greene, *Journey Without Maps* (1936; London: Bodley Head, 1978), p. 30.
- 18 Greene, *A Sort of Life*, p. 15.
- 19 Greene, *Journey Without Maps*, p. 30.
- 20 Greene, *The Lawless Roads*, p. 4.

- 21 Greene, *A Sort of Life*, p. 16.
- 22 *Ibid.*, p. 17.
- 23 *Ibid.*, p. 29.
- 24 Graham Greene, *Collected Stories* (London: Bodley Head, 1972), p. 476.
- 25 Sherry, *The Life of Graham Greene*, p. 12.
- 26 Greene, *A Sort of Life*, pp. 60-61.
- 27 Greene, *The Lawless Roads*, pp. 1-2.
- 28 Thracey, *A Variety of Lives*, pp. 8-9.
- 29 Greene, *A Sort of Life*, p. 42.
- 30 Marie-Françoise Allain, ed., *The Other Man Conversations With Graham Greene* (London: Bodley Head, 1983), p. 30.
- 31 Sherry, *The Life of Graham Greene*, p. 37.
- 32 *Ibid.*, p. 37.
- 33 Greene, *A Sort of Life*, p. 23.
- 34 Sherry, *The Life of Graham Greene*, p. 40.
- 35 *Ibid.*, p. 40.
- 36 Graham Greene, ed., *The Old School* (London: Jonathan Cape, 1934), p. 248.
- 37 Sherry, *The Life of Graham Greene*, p. 55.
- 38 Greene, *A Sort of Life*, p. 68.
- 39 *Ibid.*, p. 72.
- 40 Sherry, *The Life of Graham Greene*, p. 66.
- 41 *Ibid.*, p. 68.
- 42 Allain, *The Other Man*, p. 34.
- 43 Sherry, *The Life of Graham Greene*, p. 69.
- 44 *Ibid.*, p. 70.
- 45 *Ibid.*, p. 70.
- 46 Green, *The Lawless Roads*, p. 2.
- 47 Sherry, *The Life of Graham Greene*, p. 73.
- 48 *Ibid.*, p. 74.